

## 日本人本来の生き方に誇りを持って！

衆議院議員 亀井静香  
衆議院議員 今村洋史

### わが国に迫る米中という「人工国家」

—— 本日は、わが国の状況に強い危機感を抱いている亀井先生と今村先生に、危機の本質と救国の打開策について語って頂きます。まず、今村先生から日本の置かれた状況について語っていただけますか。

今村 私は、以前からチャイナとアメリカの二大国の結託という意味で「チャイメリカ」という言葉を使ってきましたが、両国に共通する点はともに「人工国家」だということなんです。この米中二大強国は、自国民すら食いつぶしながら、外に拡がっていくという帝国主義的な行動をとっています。まるで、映画『プレデター』に登場する爬虫類のような獷猛な生命体の行動です。様々な星に進出して、その星に生息する生物を獲物として狩猟してしまう獷猛な生命体です。アメリカにおける経済学者と

金融業界の癒着を描いた映画『インサイド・ジョブ』のチャールズ・ファアガソン監督の近著『強欲の帝国』の原題は「Predator Nation」ですが、まさに米中のような国家を「プレデター・ネーション」と呼ぶことができます。

この無慈悲な二国の拡張の波が、いまわが国に押し寄せています。両国に共通する理念は、経済主義、特に新自由主義です。小泉政権以降、わが国でも新自由主義が強まり、プレデター・ネーション化が進行しています。格差が拡大し、富の集中が進み、アメリカ社会に近づいているのです。

亀井 アメリカにしろ、中国にしろ、大地から草木が生える様に、自然にできあがった国じゃない。アメリカはインディアンなどの先住民の土地を収奪して作られた国



亀井静香氏

です。中国でも、諸民族を追っ払ってはそこに新たに国を築くという繰り返しをやってきました。今村先生の言う通り、米中ともに人工国家と正しいでしょう。



今村洋史氏

両国との対比で言えば、わが国は、この日本列島の中で、人々が自然に共同体としての意識を醸成して言葉や文化を共有してできあがった国家です。ところが、いまわが国が人工国家に作り変えられようとして

います。

今村先生はわが国の成り立ちという本質的な点に着目しました。日本の国柄を尊重した頭山満らの玄洋社の思想に通ずるものが、今村先生にはあるように感じます。

### 日本人本来の生き方を誇れ

亀井 明治以降、日本の欧化が進みましたが、戦後は特にアメリカの政治思想に席巻されてきました。それに対するアンチテーゼとなったマルクス・レーニン主義もまた、外来のものでした。社会党などの左派の思想も、岩波書店などを拠点とした知識人の思想も外来思想です。戦後アメリカから流入する思想に対する抵抗の理論は、それしかなかった。

そういう外来思想ではなく、我々自身の思想を取り戻さなければいけないのです。我々が生活する上で大事にしてきた感覚、我々が生きてきた術といったものを、自ら取り戻さなくちゃいけない。日本人の魂です。それを取り戻すという考えに基づいて、今後の日本の政治も指導していかなくちゃいけない。そうしなければ、日本という国は日本ではなくなってしまう。その意味で、今村先生の指摘は非常に重要です。

今村 かつて乃木将軍が日露戦争に勝利した後、「ロシ

アでは革命が起きて共産主義になりました。どう思いますか」と記者に質問された時、乃木將軍は「日本には武士道がある」と答えました。一見、見当違いの答えのようにも見えますが、乃木將軍は共産主義が「共に分かち合っている」という思想だと理解した上で、日本にはそうした主義を殊更に唱えなくても、ちゃんと実践してきたという意味で、「武士道がある」と言ったのです。つまり、「武士には自分さえよければいいなどという発想はもとよりなく、自分を犠牲にして他人を助ける。そういう生き方を日本人は実践してきたのだ」と言いたかったのです。我々は本来の日本人の生き方に誇りを持つべきです。

いま私は、富の集中など新自由主義がもたらす弊害について厳しく批判していますが、新自由主義とは社会ダーウィニズムなのです。「適者生存、弱肉強食でいいのだ、それが自然の原理なのだ」という考え方です。しかし、こうした考え方は日本人の肌には合いません。

しかも、進化論にはダーウィンとは異なる学説があります。例えば、今西錦司は「種は常に一定限度の共通性を保っていて、進化は個体ではなく種レベルで起こる」と唱えています。ダーウィンの競争原理ではなく、共存原理を主張しているのです。

—— どうして新自由主義に対する国民の抵抗が盛り上がりがないのでしょうか。

**亀井** 結局、日本人が生体反応を失ってしまったからです。針で刺されれば「痛い！」と反応するはずなのに、はり治療と思っても刺されても反応しなくなっている。第三の矢は、まさに国民に五寸釘を打ちこんでくるようなものだ。それにもかかわらず、国民は反応しない。医療の分野でも国民生活を脅かすような改革が進んでいます。今度は、大病院を紹介状なしで受診する外来患者の初診時の自己負担額を引き上げようとしています。窓口負担額に加えて1万円を求める案も出ている。ところが、何をされても国民は反応しません。「けしからん」という声も上がらない。

**今村** 国民の疎外感、無関心は強まる一方です。やがて、日本国民は政治的関心を失い、流民のような存在になっていくでしょう。

### 政治と国民を切り離した小選挙区制

—— なぜ国民は生体反応を失ってしまったのですか。

**亀井** これは、明治維新まで遡る話です。維新の理想は、「一君万民」「万民平等」でした。しかし明治国家体制ができてしまうと、当初の理想に反して、政府は権力

—— 安倍政権が6月に発表した成長戦略には、医療、農業、労働といった分野の新自由主義的政策が盛り込まれています。

**亀井** このままでは小泉時代に逆戻りしてしまいます。安倍総理は、思いもかけず再び総理の座につきました。ところが、経済政策を構築する力がないので、その真空を埋めるように新自由主義者たちが入り込んでしまった。**今村** 第三の矢の構造改革、規制改革が、第一、第二の矢と逆行する形で進められようとしています。しかも、アメリカの要求にしたがって進められています。もはや売国以外の何物でもありません。消費税増税も失敗に終わるでしょう。安倍総理は歴史に学んでいません。かつてアメリカの大恐慌を招いたのは、フーバー大統領がデフレの状況で消費税を導入したからです。これと同じ愚を安倍総理は繰り返そうとしているのです。

安倍総理は、国民の生活ではなく、政権の維持と次の選挙のことしか考えていないのかもしれない。安倍総理が好きな吉田松陰は「吾れの得失、当に蓋棺の後を待ちて議すべきのみ」という言葉を残しています。安倍総理はそれを思い起こして、自分の権力を維持することよりも、日本の宰相として後世どう評価されるかを重視するような価値観を持つてほしいものです。

者に化けてしまったのです。しかも、明治政府は天皇陛下の権威を利用しようとしました。薩長をはじめとする勝者が、世界に比類ない天皇の御存在を支配の道具にしてしまったのです。本来、靖国神社はお国のために命を落とした人すべての霊を慰めるための施設であるにもかかわらず、戊辰戦争で賊軍とされた会津藩はじめ奥羽列藩同盟の人々や彰義隊、西郷隆盛などは祀られていません。権力者にとって貢献した人だけが祀られているのです。つまり、明治以来、「一君万民」「万民平等」の理想を裏切って、権力者が国を支配してきたのです。

**今村** 今日に至る問題の原点は、まさに今亀井先生が仰ったところにあると思います。そして、国民の間に一層疎外感を拡げ、政治と国民とを切り離してしまった原因は、小選挙区制という選挙制度なのではないでしょうか。この世界に入って、政治家の実態が初めてわかりました。いまの政治家の器の小ささには驚きました。彼らが考えていることは、次の選挙のことだけです。いかにして自分の政治生命を長らえるかばかりで、国家のこと、国民のことなど、そっこのけです。

そうした政治家しか生まない制度が小選挙区制度なのだと思います。この制度では、政治家は政党への依存を深め、自らが思うところの主張をしづらくなります。ど

ここの独裁国家のように、何でもかんでも党議拘束をかけて個々の政治家の主張を封じます。また、そのときどきの「風」によって当落が簡単に左右され、地道に政策を磨く政治家がいなくなってしまう。

—— 政治家は国民よりも、党の幹部の顔色ばかりうかがうようになっていきます。自民党にしても議員の40%が1年生議員で、彼らは党の幹部の意向だけを気にして動いています。

**亀井** 先日、小沢一郎氏に言ってやりました。「貴方は俺と同じように悪人扱いされている。一度張られた悪人のレッテルは簡単にはがれないが、これをはがす方法がある。それは、小選挙区制を導入したことを心から国民にお詫びすることだ。そして、政治生命をかけてこの制度を変える、と言うことだ」と。

### イデオロギーを排した新たな団結を！

**今村** 小選挙区制は、国民から収奪して、権力を都合よく行使できるシステムなのです。しかも、未だに二大政党制だといっている人がいるのには呆れます。もはや二大政党制に意味はありません。民主党と共和党という二大政党によって政権が交代するアメリカにおいてもそうです。もちろん、両党の間には、聖書の解釈といった宗

もなるのです。小選挙区制を変えて、政治家がもつと国家のことを自由に語れるようになれば、状況は徐々に変わってくると思います。

**亀井** ただし、現実性がなくてはだめです。両院制のままにして、まず中選挙区にしていくなど、現実的な改革を目指した方がいい。そのためには、この問題をメインに主張する政党を旗揚げし、選挙でそれを訴えるべきです。—— 現在の国難をどう打開しますか。

**今村** 我々日本を守っていく政治家の存在意義とは何か、もう一度原点に立ち返って考え直す必要があります。後に続く者のために命を散らしていった英霊の思いに報いるためにも、日本を、日本人を失うわけにはいかないからです。そのためには、資本主義、社会主義といった従来のイデオロギーを排して、本当に日本国民が国際社会の中で生き延びてくために、どのような団結をしたらいいかを考えなければいけません。

本来であれば団結できるはずの人たちが団結できないのは、どうしてなのでしょう。それは、団結するための新しい旗印が見つけられないからです。その旗印を見つけてるのは我々政治家の役割だと考えています。

かつて亀井先生は、菅直人政権のときに、オールジャパンの総力を結集して救国内閣を作ろうと動きました。

教的な問題、人種差別の問題、墮胎などの社会政策などに表面上の対立はありますが、経済政策において大きな違いはありません。その本質はいずれも新自由主義なのです。両党とも富を握る1%の人のための政党です。

わが国でも、自民党と民主党、またそれ以外の野党の経済政策にも、大きな違いはありません。どの政党もレゾンデートルを失っていると思います。どの政党が政権を握っても大きな違いはないのです。自民党が転んで、別の政党が政権を握ったとしても、何も変わりません。さらに従米政権になるかもしれません。

**亀井** 政党の主張にインパクトがなくなってしまう。もはや既存の政党には存在価値がないのです。だからこそ、いま小選挙区制廃止を旗印にすれば、国民に対してそれなりに訴えることができると思います。

**今村** もともと私は民主党政権を危険視していたので、衆議院と参議院のねじれがあった方が安全だと思っていたのです。しかし、もはや事態がここまで悪化すると、一院制への移行を表に出しながら、小選挙区制を排していく方がいいと考えざるを得ません。その結果、もう一度国民の政治に対する関心を取り戻すことができれば、その方がいいと考えざるを得ません。しかも、一院制にするためには憲法改正が必要となるので、憲法改正の端緒に

枝葉の部分は違っても、幹の部分さえ一致できれば、ともに力を合わせる事ができると。あのときに、救国内閣を作れなかったことが、現在のような日本全体が沈んでいく状況を招いてしまったのです。

私は、現在バッジをつけている人間の中でいくら組み替えをしても意味がないと思います。きちんと日本を救うための主義、主張を展開して、賛同する人間が同志的に結合し、それが次の選挙で国民の負託に応えていけるような態勢をとることが必要だと思います。それこそがオールジャパンであり、救国内閣だと思います。この日本の危機を乗り切るために、亀井先生はじめ、「一致団結していこう」とリーダーシップのとれる国家観のあるベテラン政治家に、もう一働きしてもらわなければ困ります。

**亀井** いま求められているのは、選挙制度の改革を正面から訴え、国と国民のことを語る政治家を生み出せる政党です。覚悟を決めた人間がやるしかありません。医師として活躍できる今村先生には、議員の地位にしがみつく理由はありません。だから覚悟もあるはずだ。最初は一人でも、立ちあがってほしいと思います。必ず志のある人が集まってくるはず。私もやりますよ。

(聞き手・構成 坪内隆彦)